

トム・ティクヴァ、映画サウンドについて語る

トム・ティクヴァは 1993 年に彼の最初の劇映画「デッドリー・マリア」を作ったが、国際的には 1998 年の「ラン・ローラ・ラン」の成功で認知されるようになった。この映画ではローラーコースター的な展開のテンポと鋭い性格描写で観衆を圧倒した。「プリンセス・アンド・ウォリアー」はその 2 年後に製作され、またケイト・ブランシェット主演の「ヘヴン」は故クシシュトフ・キェシロフスキの脚本に基づいた作品である。

「パフューム：ある人殺しの物語」（2006）はパトリック・ジュースキントの小説が 1980 年代に国際的なベストセラーとなって以来、ほぼ 20 年かかってようやく完成を見た映画で、これまでで最も製作費をかけたティクヴァの野心的プロジェクトとして記憶される。

ティクヴァは自分の映画のために常に彼自身作曲もしているので、私は「パフューム」でのサウンドと音楽の関係について彼に尋ねた。

●一般的に、映画において音楽が担うアспектというのは、もちろん、僕らを感情的な認識に導く抽象的な関係であって、そこに何かそれ以上のものをもたらすもの。僕らは、音を通してだけでなく、音と映像の絡み合いによって、僕らにある種の感情を与える映画を何とかして確立しようとしてきた。それはシナリオに書かれた人物が実際にどう世界を経験していくのかということだ。

●だから、映画の主人公グルヌイユが鼻だけで、つまりにおいをかぐことだけで、多少とも世界というものと相まみえて確かな認識を持つことは、僕には常にはっきり筋が通っていたことだ。僕は真剣に、グルヌイユの『体験界』と呼べるもののために音による言語を見つけよう腐心していた。



「パフューム」でローラ役のレイチェル・ハードウッド（左）とトム・ティクヴァ

ティクヴァはかつてシンセサイザー映画音楽の第一人者だった。

●「プリンセス・アンド・ウォリアー」では僕らも、オーケストラと仕事したよ。あの弦合奏はまさに本物だった！それより「パフューム」の音楽は何しろとてつもなく複雑なスコアだったし、僕の人生で最大の挑戦のひとつと言って良い。とにかくやることが山のようにあ

った。僕らは非常に早い段階からスコアリングを始めたし、サイモン・ラトル卿とベルリン交響楽団にそれをやってもらえてすごく運がよかった。

サウンドについて話すとき、ティクヴァは常に音楽の要素に戻る。

●僕らの場合、まず音楽から始めなければならない。脚本に取り組んでいるうちに、僕はもう作曲を始めている。ジョニー・クリメク、ラインホルド・ハイルと僕の3人は座って、脚本と並行して作曲を進める。つまり、僕らが脚本を書いている過程で、映画の音楽に関しては音を決めているということだ。僕らがセット入りする時には、すでに音楽の相当な部分が作曲済みで、僕らは小さなオーケストラを雇ってそれを演奏してもらおう。音楽を俳優に対して本当に演奏できて、言わばそれを実際の撮影の『風景』の中に組み込むことができる。だから、みんながその中で演技をする際には、もう映画の雰囲気と音の世界を試すことができるということになる。これは前からやっていたことだよ、ただ「パフューム」みたいな規模じゃないけど。

彼は最初の時からドルビー技術を使用していたのだろうか？彼は笑って答えた。

●まさか！「デッドリー・マリア」は、ほんとに低予算で、音はモノだった！「ウィンタースリーパー」（1997）が、僕がドルビーを使った最初の映画だったよ。以来、僕はずっとドルビーと仕事を続けている。僕は、サウンドデザインに関してはだいたい全く同じルールと仕事をして来た。ダーク・ジェイコブは、「パフューム：ある人殺しの物語」のサウンド・デザイナーの1人だったし、「ラン・ローラ・ラン」、「ヘヴン」他、僕のほとんど全ての映画でも一緒だった。マティアス・ランパートはリレコ・ミキサーで、僕のほとんど全作品をミックスした。

映画の撮影やミキシングをするとき、彼はDVDと家庭鑑賞を意識するのか？

●基本的には、音に関してはそれは全然問題じゃないね。最近では、人々は自宅に本当に楽しめる音響システムがあるので、敢えてDVD上にも、相当複雑な音のレイヤーを持たせても、人々は現実にそれを聞くことができる！

僕も自宅でデジタル・ヘッドホンで映画を見ている人を沢山知っている。それは凄いよ。ミキシングの段階で、リレコ・ミキサーは、必ず劇場用のミックスと、テレビのためだったり、DVDのためのミックスも、それは圧縮なんかのことで全く異なるミキシングで、それぞれ作業している。僕らはDVDには非常に高度なミックスを作るので、それを聞くためには良い器材が必要だね。ますます多くの人々が自宅で良いプロセッサースピーカーを持つようになるということは励みになるね。

デジタル・カメラへの移行は主流映画にどう作用すると思うか？

●DVかあるいはもっと安いシステムで撮影すると言うんじゃないければ、今のところ僕にはそれですっと簡単になるとは思えない。それにフォーカスに関して35mmフィルムとほぼ同レベルのシステムをどれか選びたいということなら、まだまだそこまでは行っていないと思う。

僕はもうしばらく時間をかけるつもりだけど、もちろんある時点で、僕らみんながそうすることになるだろうし、それにもっともっと安くなれば、さらに多くの人を使うことになる。それはちょうど 1970 年代中頃にテクニカラーの時代が終わろうとしていて、その変化を僕らが乗り切ったのと似ているね。もちろん違和感はそこにあった。でもみんな最後にはそれを受け入れた。それからまた、僕らは限りあるシステムの中でどうやって強い色彩を作り出すかを学んだ。

●僕らはデジタル素材を処理する面白い方法を見つけると思うよ。僕はそれを心配していない。僕が本当に変える時には、可能な限り優れた映像であって欲しい！

「地獄の黙示録」のようなスペクタクルサウンドの映画が好きかと彼に尋ねると、ティクヴァは見解を述べた。

●サウンドデザインは沢山の雑音が鳴る映画で賞讃されることがよくあるけど、僕は静かな映画の大ファンなんだ。2001 年に「ヘヴン」を作ってから、僕は静かな映画で納得の行くミキシングをすることが如何に大変か知っている。静けさには数え切れないくらい様々なレベルがあるんだ。大音量のエフェクト指向で、音楽過多の映画を作る方がはるかに簡単だよ。

●僕は、サウンドデザインというものが始まった頃に作られた映画のファンでいるつもりだし、それはまだこれからも面白い結果を届けることができると思う。例えば「エクソシスト」は驚くべきサウンドトラックで、デービッド・フィンチャーがもっと最近やっていることには本当に敬服する。彼の映画「セブン」での全編の緊張感は、まさに音楽とサウンドをとっても緻密に絡み合わせたサウンドトラックを通して作り上げられていると思う。



「パフューム」のセットでダスティン・ホスマン(右)とティクヴァ (中央)